

2017年度 バイリンガル・マルチリンガル(BM)子どもネット研究会  
2017年8月20日(日) 於:国際基督教大学

# DLAで分かる つまづく子どもの実態



櫻井 千穂 (同志社大学)

## 目次

1. 問題の所在
2. CLD児の一時的リミテッド状況
3. JSL対話型アセスメントDLA
4. 事例紹介
5. 課題と展望



## 問い

◇目の前のCLD児の言語発達  
／言語習得の状況は？

年齢相応のレベルに達していないように見えた時  
◇その要因は？



## 実態と要因の診断の難しさ

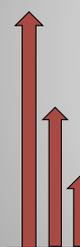
- CLD児の複数言語能力は、暦年齢、入国年齢、滞日期間、言語接触(社会的/心理的)の量と質による→CLD児の「標準」「定型」といった基準がない
- 二言語での発達検査の実施が難しい(通訳がある場合でも十分な配慮が必要)
- 発達検査で低い値が出た場合の結果の解釈
- 内的要因と外的要因にはっきり分けられるわけではない



## しきい説

Threshold Hypothesis (Cummins, 1979)

<p><b>高度バイリンガリズム</b> (Proficient Bilingualism) 両言語が上のしきいを越す</p>	<p>知的発達にプラス</p> <p>上のしきい</p>
<p><b>偏重バイリンガリズム</b> (Partial Bilingualism) 1つの言語だけが上のしきいを越す</p>	<p>プラス・マイナスなし</p> <p>下のしきい</p>
<p><b>リミテッドバイリンガリズム</b> (Limited Bilingualism) 両言語とも下のしきいを越せない</p>	<p>マイナス</p>



## (一時的)リミテッド状況(中島2007)

複数の言語を獲得していく過程でどの言語も年齢相応のレベルに達しない状況にあること

- 二言語全体の発達が遅い(幼児・小学校低学年)
  - ・話し始めるのが遅い
  - ・親にも通じないことばを話す
  - ・文字習得のレディネスが育たない
  - ・文字を覚えるのが遅い
- 教科学習言語が伸び悩む(小学校高学年～)
  - ・授業に出ているが、参加ができない状態が長く続く
  - ・話し言葉から書き言葉(リテラシー)への移行ができない
  - ・抽象的な思考が不得手

環境が変われば解消する



## 外国人児童生徒のための JSL対話型アセスメント

文部科学省委託事業(2010-2012)「外国人児童生徒のための総合的な学習支援事業」における「日本語能力の測定方法の開発」(東京外国語大学留学生日本語教育センター 受託)

# Dialogic(対話型) Language(言語) Assessment(アセスメント)

文部科学省HP  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm)

## DLA開発の経緯(1)

- ・カナダ日本語教育振興会が会話カテストを開発(1980年代～)
- 『バイリンガル会話テストOBC  
Oral Proficiency Assessment for Bilingual Children』(2000)
- ・国立国語研究所の実態調査(2000～2003)

日本国内のCLD児用に改変

DLA<はじめの一步>, <話す>

- ・導入会話, 語彙力(55問の基礎語彙カード)
- ・基礎面・対話面・認知面の会話力

## DLA開発の経緯(2) DLA<読む><書く> の基盤理論

マルチリンガル環境におけるリテラシー獲得の教育的枠組み  
(Cummins, 2009, カミンズ・中島2011)

読み書きの達成

読み書きへの関わり

足場作りで 内容理解を 支援 (受容と産出)	既存知識 の活性/ 背景知識 の構築	アイデン ティティの 肯定	ことばの 強化
---------------------------------	-----------------------------	---------------------	------------

## DLA開発の経緯(3)

欧米の多読用アセスメントを参考に  
(1冊のテキストを読んで、読解力・音読行動・読書傾向から評価)

支援つきアセスメント

2008～ 国内の言語的マイノリティの子ども用  
『対話型読書力評価』中島・櫻井(2012)  
「読むまえに」「読みましょう」「話し合しましょう」「読んだあとで」で支援  
子ども主体のテキスト選択, キーワード確認, 背景知識の活性, 読み聞かせ,  
理解口頭再生・やりとりでのスキファールディング, アイデンティティ肯定

DLA<読む> 新しいテキスト

DLA<書く>, DLA<聴く>

## DLAのダイナミック・アセスメントとしての側面(1)

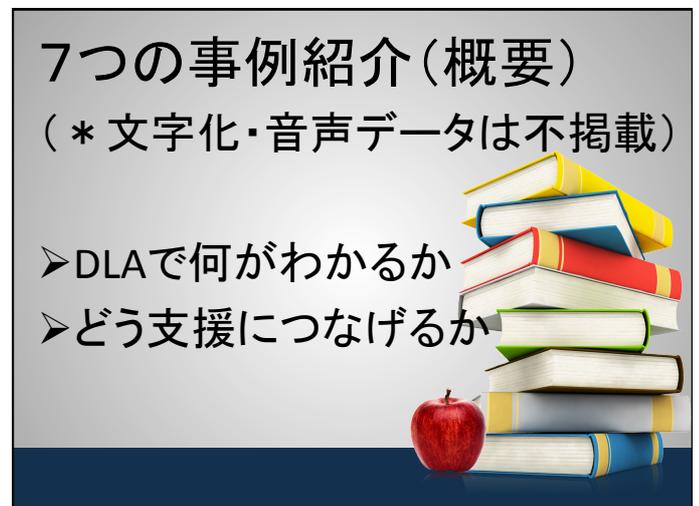
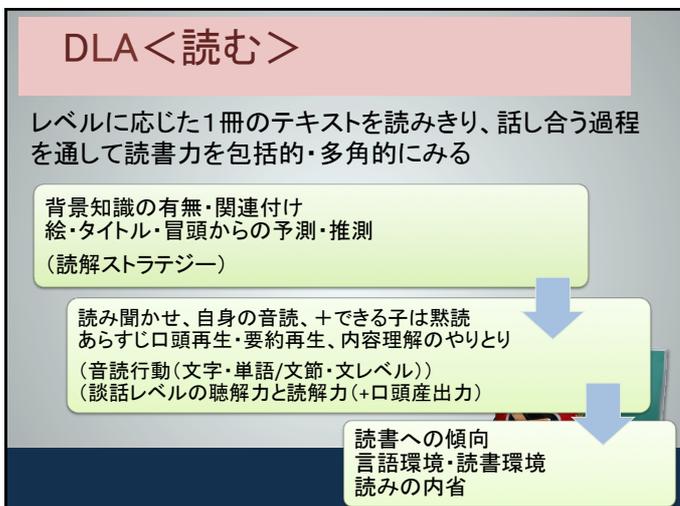
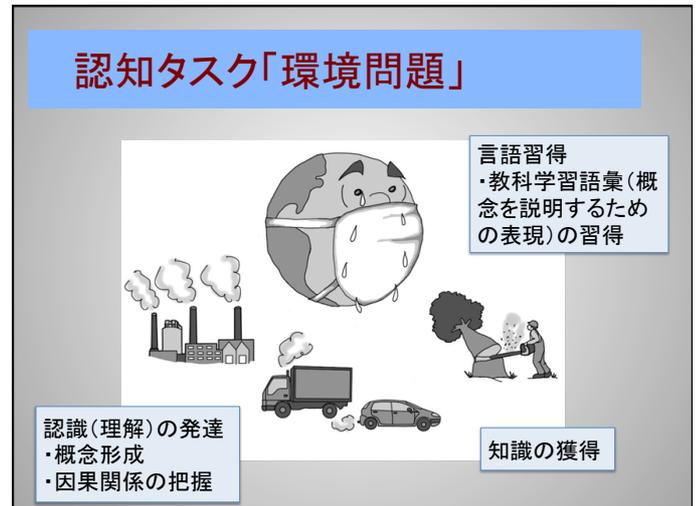
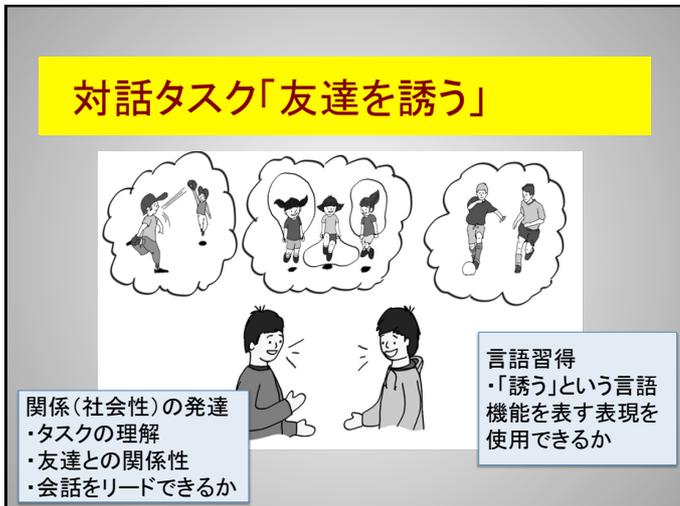
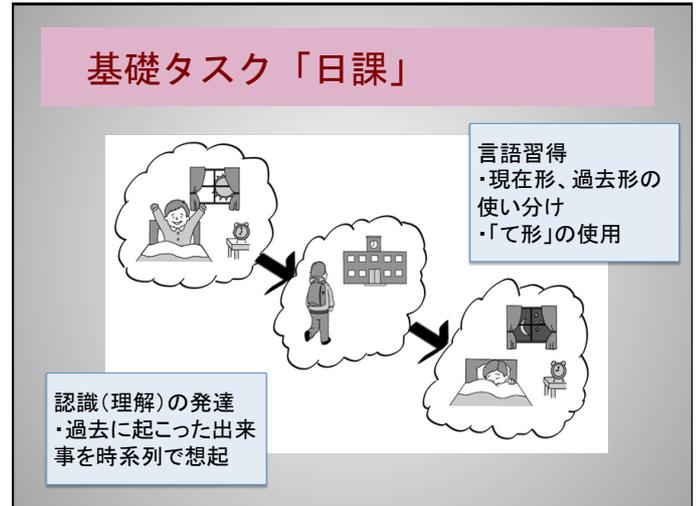
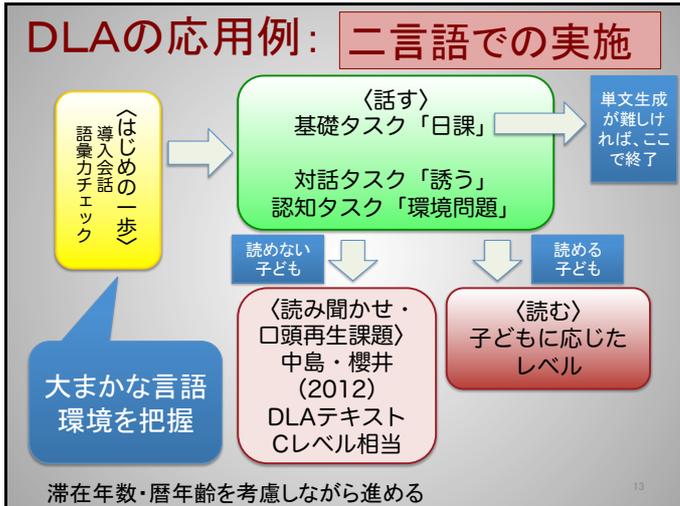
# Dynamic Assessment

発達の最近接領域(Zone of proximal development)  
(Vygotsky, 柴田訳, 1962)

## ダイナミック・アセスメント(DA)の可能性

➢前川・梅永・中山(2013), Haywood & Lidz(2007)  
静的アセスメント(Static assessment: SA)と比べて、  
指導への示唆を得られる

➢Lynette Austin (2016)  
得点だけでなく、支援にどのように反応し、どう変化するかを見ることで、CLD児の示す状況が、異なる言語環境に起因するか、言語障がいによるか、見極めに役立つ



**事例1: 9歳, 入国年齢5歳, 滞日期間4年,  
ロシア語母語(日常会話レベル)児童**

- 小学1年生相応のテキストレベルを読んで、あらすじの口頭再生を一人でおこなうことは難しかった。
- しかし、支援を受けて大まかなあらすじを最初から最後まで話すことができた。



この評価から、教科学習言語能力の支援方法のヒントが得られた。

**事例2: 9歳, 入国年齢8歳, 滞日6ヶ月,  
中国語母語(年齢相応以上)の児童**

- 日本語力と認知力に大きな差が見られたケース
- 基礎語彙や文法、文の生成の力は不十分。
  - にもかかわらず、「環境問題」の概念説明や意見(対策)表出といった認知負荷の高いタスクに挑戦できた。



母語で培ってきた力を生かすことで、滞日1年半でほぼ年齢相応の日本語の読書力を習得。

**事例3: 7歳, 日本生まれ, 中国語母語児童  
(真嶋・櫻井・孫 2013)**

- 小学1年生の時点では、二言語ともにリミテッド状況が心配された。
- 家庭での母語の学習(字幕付きテレビ番組の視聴による中国語の文字の自然習得)と学校での日本語支援と母語の価値付け。



小学5年生の時点では二言語ともにほぼ年齢相応のレベルにまで伸びた。

**事例4: 8歳, 日本生まれ, 5~6歳で8ヶ月帰国,  
スペイン語母語児童**

- 日常レベルの会話における意思疎通が十分にはかれなかった。
- 保護者と担当教員との連携により、それぞれが強い言語で語りかけを重点的に実施。
- 7か月後には、語彙・文法面での課題は残るものの、二言語での意思疎通が可能となった。



機能的な障がいもあるかもしれないが、環境の変化により、言語能力が大きく伸びた。

**事例5: 9歳, 入国年齢4歳, 滞日期間5年,  
スペイン語母語児童 櫻井(2016)**

- 二言語ともに日常会話レベルのやりとりにも課題が見られた。
- 週4日、1日4時間ずつの日本語指導が行われていた。
- 保護者は日本語習得が十分進んでいないことに気づいておらず、適切な介入が果たせなかった。

**事例6: 11歳, 入国年齢6歳11ヶ月,  
滞日期間4年3ヶ月, スペイン語母語児童**

- 二言語ともに話す力と読む力の間に大きな差が見られたケース。
- 読む学習を小学1年の時から二言語で続けていた。
  - しかし、日本語は拾い読み、スペイン語もスペリングの読みに課題が見られる段階。



この後、専門機関での診断につながった。

**事例7:12歳, 入国年齢11歳, 滞日期間5ヶ月,  
スペイン語母語児童 (櫻井2008)**

入国時に母語であるスペイン語力(概念把握,  
読書力, 作文力など)に課題

第二言語となる日本語での教育環境の中で,  
母語力を含めた認知的発達をいかに促すか

取り出し授業での母語による先行学習と  
探求型の在籍学級での授業との連携実践

母語の力が飛躍的に伸び、日本語力にも  
伸びが見られた。

**課題と展望**

- ・CLD児の二言語データの蓄積
- ・二言語の談話レベルの力の  
観察の重要性



研究分野間の連携



**参考文献**

- Cummins, J. (1979). Linguistic interdependence and the educational development of bilingual children. *Review of Educational Research*, 49, 222-251.
- Cummins, J. (2009). Fundamental psychological and sociological principles underlying educational success for linguistic minority students. In T. Skutnabb-Kangas, R. Phillipson, A. K. Mohanty, & M. Panda (eds.), *Social justice through multilingual education*. Bristol: Multilingual Matters. 19-35
- Haywood, H. Carl & Lidz, Carol, S. (2007) *Dynamic Assessment in Practice Clinical and Educational Applications*. Cambridge University Press.
- Lynette Austin. (2016). Dynamic Assessment with ELLs: A Step-by-Step Tutorial. Attendee Questions Remaining Unanswered during the Live Webinar on 10-7-2016
- ヴィゴツキー レフ著, 柴田義松訳 (1962/2001)『新版・思考と言語』新読書社
- カナダ日本語教育振興会 (2000)『子どもの会話力の見方と評価—バイリンガル会話テスト(OBC)の開発』カミンズ ジム著, 中島和子訳著 (2011)『言語マイノリティを支える教育』慶応義塾大学出版会
- 櫻井千穂 (2008)『外国人児童の学びを促す学籍のあり方—母語力と日本語力の伸長を目指して』『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』4号pp.1-26.
- 櫻井千穂・孫成志・真嶋潤子(2012)『日本生まれの中国ルーツの児童に対する二つの言語能力評価と言語教育の重要性—児童Kの二言語能力の変化に着目して』『21世紀の世界日本語教育・日本語研究—中日両国国交正常化40周年記念論文集』高等教育出版社pp.188-197
- 櫻井千穂(2016)『スペイン語母語児童生徒の二言語能力の関係—物語文の聴解・再生課題の分析を通して—』『日本語・日本文化研究』26号、大阪大学、pp.42-61
- 中島和子 (2007)『外国語習得と母語との関係—セムリンガル現象の要因と教育的処置に関する基礎的研究報告書』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金基盤研究(B)
- 中島和子・櫻井千穂 (2012)『対話型読書力評価』平成21～平成23年度科学研究費補助金基盤研究(B) 文部科学省 (2014)『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA (Dialogic Language Assessment)』
- 真嶋潤子・櫻井千穂・孫成志 (2013)『日本で育つCLD児における二言語とアイデンティティの発達—中国語母語話者児童K児の横断研究より—』『日本語・日本文化研究』第23号 大阪大学 pp.16-37
- 前川久男・梅永雄二・中山健 (2013)『発達障害の理解と支援のためのアセスメント』日本文化科学社